

第一日 江戸八丁堀く川崎く神奈川宿

鎌倉鶴が岡、江の島詣の事、あまた
としおもひわたりつれど、何くれと世の
ことわざしげく、また道の程もやゝ遠
ければ、心にもまかせざりしを、ことし
ばかりは何のさはる事もなくて、卯月
中の八日しのめに出たつ。空のけしき
いとづかなり。

ねぎ事のとしをかさねて夏衣
けふおもひ立 たびぞすゞしき
高輪にてしばし休らふ。東海寺・海安寺
の紅葉、過にし秋見しおもかげなど
しのばれて、青葉しげれるさまも見ま
ほしけれど、行先のいそぐまゝに、立も
よらず、さめず・あらぬが崎をも打過て、
大森なる梅園に遊び、六郷の舟渡しも
いとやすらかにこえ、川崎の萬年屋と
いへるに立よりて、昼の支度などとのへ、
神奈川の井柵屋にやどりぬ。それより
むかひなる権現山にのぼり、海面はるかに

・ 思いわたる…思い続ける。
・ つれど…けれど。

・ ことわざ（事業）…出来事、仕事。
・ しげく…忙しく

・ 中の八日…中旬の八日。十八日のこ
と。

安政二年四月十八日は新暦の
一八五五年六月二日にあたる。

・ ね（祈）ぎ事…願う事。

・ 夏衣…夏衣を裁つた意から「旅立つ」
などに掛かる。

・ 高輪…江戸の出入り口「大木戸」が
あった。

・ 海安（晏）寺…紅葉の名所。

・ あらいが崎…古くは荒蘭ヶ崎。万葉
集にも詠まれた景勝の地。新井と入
不斗両村合併で「入新井」の地名が
残る。

・ 六郷（川）…多摩川下流の名。

・ 支度…食事すること。

・ 井柵屋…井柵屋の誤記。権現山の向
かいにあった。

・ 権現山…台場建設のため削られた。
現在の幸ヶ谷公園。

野毛・本牧のあたりを見れば、ゆふげの

けぶり^煙心ぼそく立ちのぼり、うしろ

さまに見かへれば、田畑もまた一つの気色^{けしき}なり。やゝ日も西にかたづけば元のやどりに帰る。

第二日 神奈川く関く能見堂く金沢

十九日晴、辰の刻近きころ、此やどりを
立出、台の茶店を過て、浅間の御社に

まうつづ。富士の人穴と云へるもめづらし。

程が谷より金沢の道、まがりく^曲て関と

いへる立場にやすらひ、山坂のけはしき

道を過て能見堂にいたりぬ。この所の

景色、筆にもおよび難しとて、いにしへ

巨勢の金岡が筆を捨てんも、実にこと

わりとおぼゆ。爰にふですての松とて

大樹あり。むかし、心越禅師この所に

来り給ひて、もろこしの西湖の八景に

似たりとて、八景の名をばつけられし

とかや。此寺の額の面、竹葉の詩、其筆

今に残れり。堂のかたはらに三星といふ

亭あり。そこより法師の出来て、八けいの

所々見よとて、遠めがねてふ物かしたり。

・気色：おもむき、情趣。

・辰の刻：朝八時。

・富士の人穴：芝生村の浅間神社
にあった穴。富士につながって
いるという伝説あり。

・関：横浜市港南区関。当時この地
域では中心的な集落で立場があ
った。

・立場：宿と宿の間で休息や人馬
の継立をしたところ。

・巨勢の金岡：平安前期の貴族・
宮廷画家。

・ことわり（理）：もっともなこと。
・心越禅師：江戸初期に中国から
渡来した禅僧。

・西湖の八景：瀟湘八景の誤り。

・てふ：という。

これにいたく興をそへて、**爰**にしばし

休らひ、それより立出て、道すがら君が

さき一葉の松、いにしへ頼朝公の植

給ひしかや。まがりくゝて瀬戸橋の

かたはらなる東屋といへるに至りぬ。今宵の

やどりをこゝに定めて、さて**照手姫**のふす

べ松とかや、その木の本に小社有。其あたり

より舟に棹さし、また漁舟をも伴ひて、

野島が磯、夏島のこなたにて、汐の干

がたにおり立ち、はまぐり其外いろくゝの

貝などひろふに、近きあたりのわらはべ

寄来て、にこやかに手伝ふさまもをかし。

はや夕みち**来**べしとて、舟人のあわ

たぐしうさぐめくに、名残つきざれど

舟にうつりぬ。**彼**わらはべ共に菓子など

あたへ、すな取舟にあみひかせつゝ、ともに

入江へかへるさの左りのかたに、一覽亭

とて、はるか山のうへなるに**あがり**見れば、

まことにすくれたる所のさま、筆にも詞にも

つくし難し。南ははるかに安房・上つ

ふさの山々見渡され、浦賀の崎・さる島・

・君が崎一葉の松…内海へ突き出た「君が崎」にあった松。八景図などに描かれる。

・東屋…瀬戸橋西側にあった。江戸名所図会にも描かれた代表的な旅館。

・照手姫…伝説の小栗判官の妻。

・ふすべ松…照手姫をいぶり殺そうと縛り付けた松。かつては小島にあった。

・棹さす…棹を水底に突いて舟を進める。

・野島が磯、夏島のこなた…野島の磯の夏島側。

・さざめく…騒々しく音をたてる。ざわめく。

・すな取舟…漁る舟。

・帰るさ…帰る時、帰りがけ。

・一覽亭…野島の対岸、室の木あたりにあった展望台。

・上つふさ…上総のこと。

えぼし島・夏しま、海づらにつき出、

ひんがし北をのぞめば、称名の遠寺・

小泉ほのかに見ゆ。乙友・平かた・野島・

洲さき・瀬戸を見おろし、又見かへれば、

うち川より富士のしら雪はるかにて、

何にたとへむやうもなし。詠尽せれど

日は不二の嶺にかくれ、たそがれ近しとて

人々すすむれば、この山をおりて、また舟に

棹さし、瀬戸の東屋に帰りぬ。此家の

高とのより遠目がね取出て遠近を

見めぐらす内に、日も暮はてぬれば、

燈火てらし湯あみなどす。ほどなく網もて

取得し魚など、望のまゝに物して持出し

たれば、日ごろは好まざれど、盃めぐらし、

とかくしてふしどにいらぬ。

第三日 金沢く鎌倉く長谷

廿日晴、夫々に支度とのへ、辰のこの頃に

このやどりを出で、瀬戸明神に詣づ。この

みやしろは頼朝公勧請し給ふとかや。

またびは島弁財天の御やしろに詣づ。

こは政子御前の勧請なりとぞ。蛇木と

いふ幾木ともなく生たてり。夫より金沢

・乙友：乙臚。

・不二：富士。

・高殿：高い建物。

・物して：ここでは「料理して」。

・ふしど：寝床。

・瀬戸明神：瀬戸神社。治承四年（一一八〇）、頼朝が伊豆三島明神から勧請。

・琵琶島弁財天：琵琶島神社。

治承四年、北条政子が日頃信仰する琵琶湖の竹生島弁財天を勧請、海中に島を築いて創建。

・蛇木：金沢八銘木の一つ、江戸時代に台風で倒れた枯れ木が瀬戸神社境内に残っている。蛇混柏（ジャビヤクシン）。

・幾木：幾本のことか？

・金沢侯：六浦に陣屋をおいた米倉家。一万二千石の大名。加賀金沢と区別するため「かねさわ」と呼んだ。参勤交代で金沢道を通った唯一の大名。

侯の陣營の前より金龍院へ行。堂の

かたはらにおほきなる石あり、むかし三島

明神を此所に勧請せし時、いづち

よりか白幣飛来りて、此石の上にたてり。

さるゆゑに飛石と名付とかや。こゝより

はるかにのぼりてひとつの詠の亭あり。

きのふ見し一覽ていとはまた八景のさま

かはりて、いとおもしろし。

百千度 見るともあかじ 金沢や

とりならべたる やつの名所

少しくだりて龍燈の松あり。坂をおりて

此寺を立出。左りのかた塩場有。それより

田畑の中を過て朝比奈の切通しに

かゝる。この所坂道なり。右の方に鼻かけ

地藏とて石の像あり。武蔵・相模の

さかいとかや。弘法大師の作り給ふといふ。

此峠にてしばらく休らひ、又まがりく

麦はたを過、梶原の屋敷あと、ほゝ焼

あみだ、せん水川を渡り、杉本の観世音に

詣づ。坂東一番の札所なりとぞ。哥の橋を

わたり、えがらの天神の御社にまうづ。

・金龍院…臨済宗建長寺派の寺。

・おおきなる石…もとは山上にあったが、文化年間の地震で現在の地に落ちたという。

・ひとつの詠の亭…九覧亭。昨日訪れた一覧亭とは別の亭。

・やつの名所…八景のこと。

・龍燈の松…所在地不詳。

・塩場…塩を作る所、かつて塩田だった所。

・朝比奈の切通し…鎌倉七切通しの一つ。朝夷奈三郎義秀が切り開いたという伝説。

・鼻欠け地藏…

・梶原の屋敷…梶原景時の屋敷。

・頼焼阿弥陀…十二所光触寺の中尊の如来。

・せん水川…滑川の上流。

・杉本の観世音…三体の十二面観音を本尊とする鎌倉最古の寺院。坂東三十三番の一。

・荏柄天神…鎌倉の鬼門、二階堂にある古社。

大^塔とうの宮の土の牢、此所右の方、頼朝公
屋敷跡、今は畑となれり。大^蔵くら、この^処
町家有。筋違^替橋、宝海寺前、北条ならびに
頼^経つね将^軍屋敷あと、鶴が岡三の鳥居
前、雪の下なる大沢にてしばし休らひ、
あ^案ない子^内を伴ひて赤橋といへるをす^過ぐ。

こゝに左り右にわかれて紅白の蓮池あり。
右のかたに島三つ有。その中に弁天の社^{やしろ}有。
いにしへは島四つ有しを、義経公八^屋嶋出陣
の折、切^勝かたんとて一^切島をきり崩し給ふ
よし。左りの白はすのかたは四^紅島あり。池の
廻り松の木なみたてり。二王門は三^立棟^云
づくり、此二王尊は雲^運慶の作といふ。左りの
かた護摩堂、不動尊を安置せり。大山の
不動尊と同じ作の由。昔平家追討の
時^{みどろ}、この御堂にて文覚上人にこ^降うぶくの
祈りをせさせ給ひしに、左りの方の童子、青
牛に乗給ひしが、こ^降うぶくかんおうのしるし
にや、前のひ^膝ざを折しといふ。正面神楽殿、
右に大塔、五智^菩ぼさつを安置せり。同じ
所にし^鐘ゆろう、又臥龍柳あり。そのさま

- ・大^{だいとう}塔の宮：おおとうの宮とも。後醍醐天皇の皇子、護良親王のこと。
- ・土牢は現在鎌倉宮内にある。
- ・頼朝公屋敷：鎌倉初期の幕府役所。
- ・大蔵（倉）幕府とも。
- ・頼経将軍：摂家九条家から迎えられた鎌倉幕府四代将軍。

- ・紅白の蓮池：源氏池（白蓮）と平家池（紅蓮）。
- ・八嶋：屋島のこと。

- ・白はすの池：「紅はす」の誤りか。

- ・二王門（仁王門）：金剛力士を左右に安置した門。

- ・雲慶：運慶（以下同じ）

- ・護摩堂：真言宗などの寺院で、護摩をたぎ修法を行つための仏堂。本尊は不動明王像。

- ・文覚上人：鎌倉初期、真言宗の僧。
- ・左の方の童子：前足を折った水牛に乗っている大威徳明王像のこと。
- ・感応：祈祷が仏に通じること。

- ・五智菩薩：密教で五つの知恵をあてはめた五つの菩薩。

いにしへはさこそと思はるれ。なほ右のかたに^古

姫石大明神とあがめし大石有、是を^崇

いの^祈る時は、こしよりしもの病を治すといふ。^腰_下

夫より右のかた、社地を出て畑を過れば^{それ}_{かた}

寺有。門前に天正といふ年の御朱印の

制札建たり。本尊は十一面観世音を

安置せり。堂の前に由井の長者の七所に^(比)

たてしといふ塔一つたてり。其娘の七つに^建_建

なりけるが、鷺にとられて鎌倉の府の^捕

中に七所血を落したるに、其ところに^所

たてしとぞいふ。此長者は北条家六代の^建_云

ころの人なるとかや。夫より尚、坂をのぼれば、^頃_登

頼朝公の五輪の塔有。玉がき、鳥居は寛永^垣

の頃、薩摩の太守より奇附せられし^(寺)

よし。右のかたの坂をのぼりて、大江広元・^由_方^登

島津忠久の墓へまいる。また元の社地に^参

いりて、右の方に薬師堂有。神功皇后を

勧請せし由。若宮八幡宮の御やしるに^社

まうづ。此御神は仁徳天皇を祝奉る由。^詣

もとは由井が浜に有しを、こゝに移し^(比)

奉りしといふ。此御社にて昔頼朝公の^云_{みやしる}

・さこそ…さぞや、さぞかし。
・思はるれ…思はるの已然形。
・思われるけれど。

・姫石大明神…現在は源氏池の島に
安置の旗上弁財天社。

・腰より下の病…婦人病。

・畑を過れば寺有…頼朝法華堂のこと。
現在は碑のみ。

・十一面観音…観音菩薩の化身の
一つ、頭部に十一の顔を持つ菩薩。^比

・由井の長者…藤原鎌足の子孫とされる
豪族染屋太郎時忠のこと。

・七所…鷺に捕られた娘の血が落ち
た七ヶ所。

・北条家六代…六代執権長時のこと。

・五輪の塔…頼朝の墓。

・薩摩の太守…薩摩藩主。島津家譜
では初代は頼朝の庶子と伝える。

・元の社地…八幡宮境内。

・若宮八幡宮は由比が浜から遷座。

しづか御前に法楽の舞を乞給ひて、義経の
行^方へを尋^問とひ給ひしとや。夫より経堂
に参る。もろこしより七千巻の経文を

奉納ありしを、八角輪蔵にをさめし

よし。こゝを出て八幡宮の石段、はゞ五間も

有べし。十間余りの^登ぼる。左りの下に隠れ

いてうとて大樹あり。むかし若宮の別当

公暁、伯父実朝公を親の敵とて、此いてう

の陰より出てうちまいらせしよし。北條

義時のはからひなりしとか。石段をあがれば、

右に鶴亀石・影向石とて三つあり。猶

右に六角堂あり。隨身門は是も雲慶

のつくれりといふ。朱に金銀をちりばめ

たるみやしろたふとすと云も余りあり。

万代も さかえ久しき 八幡山

あふぐもたかし 神の広まへ

廻ろつの内、若宮の神輿四つ、八幡宮の

神輿三つを置き。鎌倉將軍以来の

宝物種々あり。御社を出て左りのかたに、

あいぜむ明王をゝがみ、夫より丸山稻荷、

此みやしろは鎌足公勧請のよし。坂を

・法楽…楽を奏し舞で神仏を楽しませ
ること。また、和歌・芸能などを神
仏に奉納すること。

・輪蔵…転輪蔵の略。経蔵に設置した、
一切経用の回転書架。中央の柱を中
心に回転する。

・隠れ銀杏…將軍実朝を暗殺した公暁
が隠れていた八幡宮の銀杏の大木。

・公暁…二代將軍頼家の次男（三男と
いう説も）。叔父で三代將軍実朝を暗
殺。

・北條義時…時政の子、二代執権。

・広前…神の御前。神社の前庭。

・愛染明王…『新編鎌倉志』に運慶作と
記されている仏像。神仏分離で現在
は五島美術館に所蔵

・丸山稻荷…鶴岡八幡宮鎮座以前から
あったといわれている神社で、八幡
宮造営の際に現在地へ遷された。
「地主稻荷」という別名も。

・鎌足公…藤原鎌足。

下れば頼朝公の御社有。なほ坂を下りて
 十二院の惣門をいづ。昔は二十五ぼさつに
 かたどりて廿五院有しが、今は十二院に
 なりし由。右の方小袋坂をのぼりて
 青梅聖天にまつ。新居のゑんま、れいの
 雲慶の作といふ。こゝより山の内へいで、
 五山第一の建長寺へまいる。表門左りの方、
 長者の七塔の内一塔あり。山門を入て地藏
 堂、佐山地蔵と云。本堂のうしろ、庭前
 の池の向ひに松の大樹あり、昔若宮の
 御神跡を此まつにたれ給ふとぞ。門を出て
 杉が谷弁天に詣づ。弘法大師の御作といふ。
 はるかに洞門を出て右の方、浄寿寺へ
 まいる。尊氏公御建立のよし。足利家
 十三代の御墓有と聞しかど、この日門に入
 事をゆるさず。左りの方なる遥の山の上に、
 冷泉為相卿の御はか有と云。其山の麓に
 山の内の上杉家の屋敷有しよし、今は
 管領屋敷の名のみ残りてみな畑なり。
 右のかたに矢柄地藏尊立せ給ふ。権五郎
 景政の守り本尊と云。爰を過て左の方、

・頼朝公の御社…正治二年、朝廷か
 「白旗大明神」の神号を賜り、八
 幡宮の西側に創建。
 明治十八年、八幡宮東側に遷され
 た。

・小袋坂…巨福呂坂。

・長者の七塔の内一塔。

・地藏堂…仏堂のことか。堂内に地
 蔵尊を安置。「佐山」は不明。
 ・本堂…現在方丈と呼ぶ建物。

・垂れ給ふ…後世の者に表示す。

・浄寿寺…長寿寺の誤記。

臨済宗建長寺派の寺院。鎌倉公方
 基氏が父尊氏の菩提を弔うため
 に建立。

・冷泉為相…鎌倉中後期の公卿・
 歌人。藤原為家の晩年の子。
 冷泉家の祖。

・矢柄地藏尊…関東大震災で焼失、
 今は桂昌庵（十王堂）前の石碑
 のみ。鎌倉権五郎景政の守り本
 尊と伝えられる。

最明寺時頼のはか有^墓。松が岡東慶寺へ
 まいる^参。表門に男禁制の札^建たてり。此所にて
 しばし休らふ。日光御山への例幣使^{れいへいし}、今宵
 鶴が岡へとまらせ給ふとて、この所を過給ふ。
 こゝを出て五山第二円覚寺へ参る。はる^通かに
 のぼりて大がね有^鐘。西洞和尚といふ人の鑄
 建^建たてしといふ。本堂は釈迦如来、天竺の
 掲^掲磨^磨かつまが作といふ。爰^{こゝ}を出て五山第四淨智寺へ
 参る。門の左のかたに五名水の内、かんろ水^{甘露}
 あり。豊川御社有。北条時頼の建立と
 いふ。此山をたゞ^直に行過れば近道のよし、
 小笹^押おし分つゝ、細き山坂を下り麦畑を
 過て、けはい坂に至り、海蔵寺へまいる。この^参
 おくに弘法大師十六の井あり。その道の^奥
 かたはらに千代^傍の尾^能そこぬけの井、また^{底脱}
 景清の土の牢など有。源氏山を右に
 見て、英勝寺を過、扇^{やう}が谷の管領屋敷に^(管)
 いたる。此源氏山は、むかし義家朝臣
 坂東の武者を集め給ひし所とかや。
 後に伝へて白はた山^旗、源氏山など云よし。
 夫より五山第三寿福寺へまいる^参。此山に

- ・時頼…五代執権。出家して最明寺殿と呼ばれる。
- ・東慶寺…臨済宗円覚寺派の寺院。山号松岡山。駆込寺と知られる。
- ・例幣使…日光に幣帛を奉るため朝廷から遣わされる祭使。
- ・西洞和尚…西潤子曇間^{せいかんすどん}違いか。
- ・掲磨^{かつま}…帝釈天の侍臣。細工物や建築をつかさどる神。転じて、美術工芸に巧みな人。
- ・淨智寺…臨済宗円覚寺派。鎌倉五山第四位。
- ・甘露水…鎌倉十井の一。不老不死の効能があるという伝説。
- ・化粧坂^{けわい}…鎌倉七切通のひとつ。
- ・扇^{せん}が谷から源氏山にぬける。
- ・千代能^{ちよのね}の底脱井…千代能(という娘の)名がついた底抜井戸。
- ・「の尾」は見せ消し。
- ・義家…八幡太郎の通称で知られる源頼朝の祖先。
- ・寿福寺…扇力谷にある臨済宗建長寺派の寺院。鎌倉五山第二位、開基は北条政子。

実朝公の御墓あり。巖窟にして唐
 草のほりあり。此君の絵かき、ほり給ふと
 いふはいぶかし。坂の半にれいの長者の
 七塔の内（**一つ**）あり。岩屋堂、浄見寺の前を
 過て、若宮小路にいたる。此道右の方に、
 人丸姫の塚、麦畑の中に松のしるし
 あり。はるかに尊氏公の屋敷あと見ゆ。
 是も畑なり。ゆきの下大沢へ立寄れば
 日暮ぬ。灯火てらしてだんかつら、二の鳥居
 を過て、びは橋前より右へ、はせ小路に
 いたる。右のかたにはせを翁の碑有。盛久
 敷革のあと、松の古木あり。長谷の三ツ橋
 屋へ戊の刻近き頃やどる。

第四日 長谷く江の島

廿一日 晴、辰の刻過る頃、このやどりを立出、
 光則寺へ参る。此寺に日朗・**日親**両上人
 の土の牢有。日蓮上人龍の口の御難の時、
 両上人および四条金吾兄弟も此所にて
 禁ごくせられしとかや。牢の前なる堂に
 六人の像有。門を出て左りのかた、山の頂に
 山王の社あり。夫より深沢の三仏へ参る。
 昔頼朝公、上総国大野五郎右衛門といふ鏑

・実朝の墓…寿福寺内にある。

・此君…実朝のこと。

・例の長者…由比の長者のこと。

・岩屋堂…窟堂。

・浄見寺…松源寺の誤りか。

・若宮小路…**八幡宮**の前の道路の旧称

・人丸姫…景清の娘。捕えられた父に会うため下向。会えずに亡くなった姫が葬られたのが「人丸塚」。

・尊氏の墓…諸説あり。

・大沢…八幡宮前、角正の隣にあった大沢旅館。休み所兼観光案内所も営業していた。

・盛久敷革…平盛久が処刑される場所に敷皮を敷いたという伝説。

・日朗上人…日蓮六老僧の一人。

・**日親上人…「親」の横に「蔵カ」の注釈がある。日蔵上人は別の時代の人。ここは日心上人のことか。**

・光則寺…日蓮宗の寺院。

・四条金吾…四条頼基。日蓮の有力檀越。金吾は左衛門尉の唐名。

物師^{もじ}に命じて造らせ給ひしか。堂は政子御前の御寄進といふ。北条高時亡びしころ、兵火のために堂は焼失^{やけうせ}て、今はぬれ仏^濡となり給ふ。御丈五丈といふ。稲村がさき、長谷寺観世音へまいる。御丈三丈三尺、春日大神作り給ふといひ伝^云ふ。本堂の内に楠の手水鉢有。東山義政公納め給ひよし。右の方に大黒天の像あり、弘法大師の御作といふ。本堂よりひん^東がし南を望めば、由井が浜・三浦・三崎の^比はてまで残りなく見へ渡りて、まことに絶景なり。坂の半^{なかば}に阿弥陀仏の像有、頼朝公の御寄附といふ。夫より山坂を越^越こえて佐助稲荷へまうづ。此道^{誼殊}こと難所なり。また三ツ橋屋へ立寄、昼の支度^調とゝのへて五霊^{ごりょう}のみやしるに詣づ。権五郎^社景政をまつる。眼薬を出せり。袂石・手玉^{たもと}石などあり。社内名物力餅^商をあきなふ。同じ所に星の井の清水あり。坂の上に虚空蔵^{菩薩}ばさつへまいる。院内に宝物あま^数多^多あり。朝比奈の切通しを^坂のぼりて、

・北条高時…鎌倉幕府第十四代執権。

・濡れ仏…屋外に安置した仏像。高徳院境内の露座の大仏。

・五丈…約十五m。実際は約十一m、台座含めて 約十三m

・本尊十一面観世音菩薩像…木彫仏としては日本最大級。高さ九・一八m。
・春日大神作り給ふ…寺史では徳道上人の作としている。

・東山義政…室町幕府八代将軍。

・佐助稲荷…大仏の北、約三百m。
伝説では頼朝の夢のお告げで社殿造立という。

・昼の支度…中食。

・五霊神社…権五郎神社とも。坂東平氏鎌倉党の五家の霊を祀った。
五霊から転じ御霊神社と通称。

・朝比奈の切通し…「極楽寺切通し」の誤記。

浄善寺・極楽寺へまいる^参。天正十八年の御朱印禁札あり。こゝを出て右のかたに^方、

弁慶の腰懸松見ゆ。ゑた町を左りに見なし、坂をくだれば^下、日蓮上人の袈裟掛松

あり。十一人の塚有。程なく支度茶屋とて

三軒あり。七里が浜にいづ^出。右の方^{かた}、横手が原

の古跡有。見かへれば^返由井^(比)が浜・袖が浦、

浪の白^寄うよせかへるもいとめづらし。わらは^童は

あまたむれ^{数多群}ゐて、海に入、さま^危ぐのわざを

なす。あや^危ふくもまた興あり。夫より腰越^{それ}

村に至る。彦根侯御預りの所とかや。

海岸に御台場あり。満福寺へまいる^参。

義経の腰越状、此寺に納め有しに、僧の

住ねば、今は同じ所なる泉常寺に預りて

あり。こゝにて見侍りぬ。夫より片瀬村龍^{たつ}の

口山^{くち}へ詣づ。院内に光りの松、うろ^洞の内に

妙見大士を安置せり。左の方、上人の

土の牢、祖師の铸像を安置せり。本堂は

敷革堂^{しきかわどう}とあり。左の方に七面の御社

あり。浜辺より海面を見渡すに、風景

殊にすぐれた^勝り。門前に四五軒茶店

・浄善寺…成就院の誤り。

・弁慶の腰懸松…弁慶がこの木に登り、鎌倉を睨みつけたという。

・袈裟掛松…日蓮が龍ノ口処刑場へ連行されて行く途中、袈裟を血で汚すのは恐れ多いと、松の枝に袈裟を掛けたという伝説。

・十一人の塚…戦死した新田党十一人の遺骸を埋め弔った塚。

・横手が原の古跡…稲村の古戦場袖が浦…七里が浜の異称。

・預かり所…幕領、旗本領を一時的に大名等に預けること。

・台場…彦根藩が子動岬^{こどうさき}に築いた八王子台場。

・泉常寺…浄泉寺の誤り。満福寺に近い小動にある。

・龍の口山…日蓮宗本山龍口寺^{りゅうぐち}。

・光りの松…日蓮が処刑されようとした時、近くの松に火の玉が飛んで来た（落雷）という伝説。

・妙見大士…妙見大菩薩のこと。
土は師の当て字。

・祖師铸像…土牢の中にある日蓮上人像。

・七面堂…法華経信者を守護する七面大明神を安置する御堂。

あり。こゝよりゆく／＼真砂^{まさご}地^ちにて、ふり^{降り}
つむ雪^積をふみ分^踏る心ちす。渚^{しづ}に出て

舟渡りして江の島へ上り、恵比寿屋と

いへるにやどりを定めて、坂をのぼ^登れば、

なかばに下の宮の別当所あり。爰^{こゝ}より右の

かたに岩本院、奥の院岩屋の別当所と

いふ。隨身門の前に小池あり、かたはらに、

かへる石とて大きな石有。坂を登^登りて

三重の塔有。五智如来を安置せりと云。

なほ坂をのぼ^登りて下の宮に詣づ。慈悲上人

の開基といふ。爰^{こゝ}より左りへ廻りて上の宮に

詣づ。慈覚大師の開基とかや。此宮の

別当所有。金剛水とて頂に清浄の

水あり。こゝより廻りて茶店二三軒あり。

遠眼鏡をかけ貝細工など商ふ。夫より

原道を過て一の鳥居有。こゝに遊行上人の

成就水とて清き井あり。山二つの堺^(境)を

地震^知しらずといふ。里^{かた}の方になゐありても、

爰^{こゝ}よりはたえてゆらずとかや。二三の鳥居を

過ぎて岩屋の本社へまづづ。本社は修理

果たれど、拝殿はいまだ事ならず。左の方に

亀石とて、自然に亀甲のあらはれたる石

・真砂…細かい砂。

・恵比寿屋；旧下の坊の宿坊。創業三百五十年の旅館。

・岩本院…奥の院岩屋と中の院の別当所、宿坊を前身とする旅館。

院号を与えられ、宗教権・支配権・経済権を持った総別当だった。

・三重の塔…神仏分離令で破壊された。

・下の宮…江の島三宮の一つ、辺津宮。

・上の宮…江の島三宮の一つ、中津宮。

・金剛水…水源に純金小判が秘められているとされ、この水で金銭を洗うとご利益あるという。

・遠眼鏡…望遠鏡。

「望遠鏡を壁などに架けて」の意か「眼鏡をかけて」か不明。

・成就水…島民を助けるため一遍上人（遊行上人）が掘り当てた井戸。

・なゐ（ない）…地震

・山ふたつ…断層に沿い浸食された海食洞が崩落して出来た地形。

・ない…地震。

・岩屋の本社…本宮又は御旅所と称された江の島神社の総本宮。

あり。夫より坂をおりて海岸にいづ。此所を

(稚脱) 児ヶ淵云といふ。龍燈の松あり。尚、岩山を

下りめづりて岩屋に至る。奥深く二町

余り有しかや。鳩あまた数多洞の中に巢をかけて、

参詣の人になれたり。留守居の弁天とて

神体有。此所より人毎に松灯ともして奥に

至る。弘法大師加持かぢ水とて清き水あり。

諸神・諸菩薩ぼさつ鎮座し給ふ。奥の院は

左右共に金胎こんだいのうぶ両部を祭る。日蓮上人

こし懸石腰などいふもあり。無明むみょうの橋少し

もどりて、胎内くぐりをぬけ、上人雲ねすがた

石云といふも有。此岩屋は弘法大師、津村津村の

湊より六字の名号みよしうをかきし舟板に

乗て此所に来り、ひらき給ひし云といふ。

頼朝公御遊覧有し時、海士あまを召めて、

貝魚捕などとしめ給ひしゆゑに、魚飯

石・まな板石などの名ありとかや。こゝに

海人の集り居たるにもとめければ、やがて

うみに入、浪を分て、あはび・さざえ榮など取得て

もて来ぬ。こゝより右に伊豆の山々、左りに

三崎の浦々、また沖の方に大島見ゆ。誠に

・稚児ヶ淵ちこがふち…鎌倉相承院の稚児白菊
がこの淵に投身したと云われる。

・龍燈の松…竜が木に登り、目の
光が灯台代わりとなり漁船の航
海安全を助けたという伝説の松。

・留守居の弁天…実物は他所に安
置しているので代わりの像があ
った。

・加持水…飲んだ人は所業が浄化
されるという水。

・金胎両部…金剛界と胎藏界。

・津村の湊…今の腰越港。神戸川流
域を古くは津村と呼んでいた。

江戸中期、腰越村が分離独立。

・六字名号…念仏「南無阿弥陀仏」
の六文字のこと。

・魚飯石…魚板石の間違いか。

奥州出征祈願に訪れた頼朝がこ
の岩の上で魚の料理をさせたとい
う。

・海人…海に潜って魚・貝・海藻等
を採集する漁を職業とする人。男
性は海士、女姓は海女と区別する
場合がある。

絶景なり。**夫**^{それ}よりまた元の坂を**のぼ**^登りて、

奥の弁天の前にいづ^出。脇道を過て夕つ

かた^方、やどりに帰りぬ。その夜、雨降り出ぬ。

第五日 江の島く藤沢宿く戸塚宿

廿二日 小^雨さめ小^止やみなし。されど海岸の

さまわすれ^様がたく、辰の刻過る頃、又岩屋へ

まい^参りぬ。まな板石のうへ^上、少し^小こ高き所へ

あ^上がるに、此時雨間なりければ、しばら^上く

海のおもて^面、磯^打うつ浪のけはひなど**なが**^眺

むるに、きのふ^{昨日}見しよりも汐高くて、この

石の上残りなく、浪の打かゝれる時は、さながら

白^妙たへの中にたゝずむ心地ぞする。寄

来る浪は、たゞ^水すいしゃうもてつく^作れるかと

おもはれ、岩のはざまにみなぎる^{狭間}なみは^波

千尋の滝の落くるにぞま^来が^粉ら。

あら磯^荒の 岩^根ね打こす 浪見れば

海^上のうへにも たきはありけ^{滝有}す

爰にやゝ久しくたてれど、詠めつ^(眺)く^辰す

べくもあらず、午の刻近き頃、(名^{脱力}) 残多くも

帰らんとて、うし^牛のあゆみ^歩の見かへり^返く

心のこ^残して本宮の前、上の宮より右の

かた^方、下の宮の鳥居前にいづ^出。こゝにて貝の

・奥の弁天：奥の宮のこと。

・千尋：尋の千倍。転じて非常に長いこと、高いこと、深いこと。

・残多く：名^{なこり}残多く。

細工物などをと^調のへ、恵比寿家に立寄て、

^{それ}夫より島をは^離なる。此時、又小雨降り出

たり。渡し場を過て片瀬村、すは^{諏訪}両社の

前より、同じ所の渡しをこ^越へ、石上村に出^{いしがみ}て

藤沢に至る。みなと屋といへるにて休らふ。

遊行寺へま^参いる。開山は一遍上人とかや。

仁王門を入て左りかたに方^方丈、右なる坂を

のぼ^登れば小栗満重の堂有。宝物種々

あり。主従十一人のはか、^墓照手姫のしるし、又

鬼鹿毛を馬頭観世音とあ^崇がめ、かたはらに

しるし有。こゝを出て松原を過、戸塚に

いた^至る。鎌倉への追分・長いも坂・焼餅ざ^坂か

などを過て、むさし・さがみの^{武蔵相模}堺木にて休らひ、

程ヶ谷の並岡といへるに夜に入てや^宿どりぬ。

第六日 保土ヶ谷ゝ田町ゝ八丁堀

廿三日 曇、辰の刻過る頃、^宿や^宿どりを出て

神奈川の台にてしばし休らひ、川崎、

六郷をこ^越えて、大森なる山本にて支度

と^調のへ、それより品川を過、八つ山にてやす^休み、

泉岳寺へま^参いり、田町なる八幡の社に詣で、

夕暮の頃我家にはか^帰へりぬ。

・調へ…購入して。

・諏訪両社…上下二社からなる諏訪神社。

・石上村…片瀬川の渡し「石上の渡し」があった。賃五文。江の島へ直接行く船便もあった。

・遊行寺…清浄光寺の通称。時宗総本山。藤沢山無量光院清浄光寺。

・小栗満重…室町時代の武将。常陸国小栗の領主。

・照手姫…小栗満重の妻。

・鬼鹿毛…小栗判官の愛馬。

・追分…戸塚宿のかまぐら道との分岐点。

・長芋坂…？

・焼餅坂…旅人が休憩する茶屋が軒を並べ焼餅を売っていた。

・境木…武蔵国と相模国の境の地。標高およそ7m。

・並岡…不明。

・田町の八幡…御田（三田）八幡。

・我家…八丁堀の拝領屋敷。

わが宿に けふたちかへる 旅衣
ぬぎあへぬ袖に あまる嬉しさ

(あとがき)

こは、道のゆくへの口すさみ、所につけたる
あそび・たはむれなど、いづれも其まことを
しるし、はた、時代の跡先のおぼつかなき
ことども、道の辺のひな人の物がたり、
あるはあない子どもものいふまゝを書つけつ、
さるは後見むをりの思ひ出にとて。

(跋文)

いにし年、李院君の木曾道中の旅日記のはし
書せし事ありしに、こたび内君、江の島詣ひでの
旅日記の末に、己が文を瓢酒屋のぬしもて
乞ひ給ふ。其日記をつらく見侍るに、名処
く／＼の歌さへ書ひつけて、目のあたり景色
を見るごとく、いとく面白う覺へける。李院君は
五七五の俳句・ざれ歌の滑稽を宗とし、
内君は気色をつばらに記して歌よみ給ふ。
夫婦別ありのひじりの教へにかなひて、
被ふたの中むつまじき家のいやさかぬく
なるべし。はし書せしあれば、又巻の末に
文しるしめるは、冬尾調ふ嬉しさに、老も拙も
忘れて筆を走らす事しかり。

安政乙卯のとし仲夏 八十翁 朴園陳人

・旅衣…旅装束

・行く手…進んで行く方向。行先。

・はた…はたまた、さらにまた。

・あるは…或は。

・さるは…(さらに)それは、実は。

・李院…著者の夫・仁杉八右衛門の号。

・書ひつけて…書きつけて(音便)。

・気色…物事の様子、自然界のありさま。
・被ふた…中身をすっぽり覆うように作
った蓋。

・冬尾…掉尾…ちよつび(とつび)。物事
が最後になって勢いの盛んになるこ
と。また最後(を飾る)の意。

・安政乙卯…安政二年(一八五五)。

・仲夏…夏のなかば、陰暦五月の異称。